

## 福祉と人権のまちづくり 五條市人権総合センター完成



五條4丁目に建設中の「五條市人権総合センター」がこのほど完成しました。

この施設では、人権問題の課題解決に向けた取り組みや、優しさとぬくもりのあるまちづくり、あらゆる差別のない人権文化のまちづくりを推進するための拠点施設としてさまざまな事業に取り組んでいきます。

建物は、鉄筋コンクリート造り3階建てで、延べ床面積1,443.2㎡、建築面積679.5㎡となっており、1階には事務所・大会議室(144㎡)・調理実習、手作り教室など行える生活改善室、相談室、保健室があり、2階には学習室、習字教室・パソコン教室、高齢者福祉講座や健康講座、カラオケなどができる交流の間(103.5㎡)があります。また3階には落ち着いた和室の教養室と子供たちが遊べる遊戯室(149.7㎡)があり、高齢者から子供まで世代を超えた交流ができますので、多くの皆様のご利用をお願いします。

■問合先 五條市人権総合センター 五條市五條4丁目1番3号  
☎24・3727 FAX 22・4094

## 新町と松倉豊後守重政

### 第9回 松倉重政よもやま話

今

回も、松倉重政に関係した逸話を紹介します。重政にまつわる武勇伝はかなり多く伝えられています。どこまで史実か定かではないし、明らかに誤っているのではないかと推測されるものもあります。しかし、これらが事実かどうかは別として、当時の松倉重政は結構有名人であったことは確かです。『諸国古城之図』(浅野文庫蔵)に図示された全国の177城の中に、松倉重政が築城した二見城の概念図が入っているのは(五條市立文化博物館で紹介されています)、二見城と松倉重政の武功が注目されていたからに他ならないと思います。この絵図には説明文があります。意識すれば「二見城は松倉重政の居城である。大坂夏の陣の時、大坂城方が郡山辺を襲い放火した情報を得るや、御所の桑山元晴や高取藩の本多政武に呼びかけたが出陣しないため、重政一人が侍70騎ばかりを引き連れて出陣し、敵の首を取った。それは此城から出たのである」となります。大和国で取り上げられている古城は、多聞山城と磯城城だけなのです。別の『古今武勇物語抄』では、この時の様子を次のように述べています。「幕府の代官が、大坂方の奈良への急襲を各地に触れ知らせたが、誰も駆けつけず。重政だけがその知らせを聞きやいなや、甲冑も用意せず駆けつけ、彼に続く侍31騎は素肌で乗り出した。彼らは徹夜で敵を追い、首を31余りを討ち取った。この行為は、徳川家康への忠節と日頃から親しい代官を見捨てることは勇士の本意ではないとの心得からである。誠に勇士の思入れというべきである」とされ、同じような話は『武徳編年集成』などでも記され「隠れなき勇将なり」と評されています。また、夏の陣での重要な戦いである道明寺口合戦における松倉の戦い振りは、余程有名であつたらしく、小堀正行・村越正重・奥田忠次・多賀常長・藤堂嘉以・丹羽氏信ら多数の武将が、松倉重政と行動を共にし軍功を挙げたかの如く記しています(『諸

家譜』)。付け加えますと、郡山などの襲撃に対しては、松倉一人が迎撃し、追撃したかの様になっていますが、実際は、藤堂嘉以が御所市付近で松倉と合流したようですし、また、奥田忠次も松倉と合流しています。この時、奈良・法隆寺などが焼失しなかったのは、松倉らの迅速な行動によって大坂勢が退却した結果だとも評価されています。

話を転じて、『常山綺談』から、夏の陣での松倉重政の家臣の話を紹介します。松倉の軍勢が大坂方の後藤又兵衛の陣を切り崩しました。この時若干18歳の松倉の家臣山本権兵衛(義安)が鎧で敵を倒し、首を取りました。しかし、この間にその鎧を敵に奪い去られてしまいます。敵方の中にその鎧が見えます!「もうこれまでだ、討死しよう。」と言い捨てて、義安は敵陣に切り込み鎧を取り返しに行きます。ところが、鎧を取り返したばかりではなく、その鎧で敵を突き伏せ新たに首を取って帰ってくるのです。実際、この激しい戦いでは、松倉重政の配下の者が大勢討たれ、弟の重次は双眼に傷を受けています。

この逸話は、当時の戦いの作法、勇士や武将のあるべき精神=武士道を示しています。首を取っている時でも、鎧を持ち去られることは油断したことになり、勇士の戦場での姿に反するという訳です。若いが故にその純粋な精神の有り様を示しているとも言えます。「松倉重政のたまふ八、勇士八思ひ切たる意地有ゆへに一生越度なく、末代まで其名高し。柔弱なる侍八思ひ切たる意地なきゆへにたびたびの不覚多し」と日頃語っていたという(『武者物語』)。以上の話は、松倉重政とその家臣らの<武辺第一ノ人>とは、単に武力そのものだけが優れている人ではなく、人情や意地を重んじる勇士でもあったことを示しています。これらの逸話は、大坂の陣で有名となった松倉重政らに仮託して、当時の人々がイメージする武将のあるべき姿を描写した物語なのだと考えられます。

(新町と松倉豊後守重政400年記念事業実行委員会委員 藤井正英)